



日本イスペインヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第19号 (2012年9月11日) / Núm. 19 (11 de septiembre de 2012)

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
7-パソ大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
(http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/)

広報委員会編集部

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
南山大学外国語学部
スペイン・ラテンアメリカ学科
佐竹謙一研究室 Tel:052-832-3111(代表)
e-mail:satakekn@nanzan-u.ac.jp

目次

【巻頭言】野谷文昭「パンドラの箱」	2
【特別記事】寺崎英樹「福島英雄たち」	3
【エッセイ】	
1. 柿原武史「スペインの教育改革案を巡る議論」	4
2. Fernando Blanco Cendón “OGIGIA: Revista electrónica de estudios hispánicos”	6
3. 吉川恵美子「ゼミで『コミュニティ演劇』を考える」	6
4. 塚原信行「大学をとりまく環境の変化と 大学教員としてのキャリアパス」	7
5. Arturo Escandón “Paradojas fundamentales de la enseñanza del español”	9
6. 安達直樹「創作スペイン語料理」	10
7. Danya Ramírez Gómez “La Enseñanza de Lenguas en la Tercera Edad”	11
8. 田尻陽一「音の翻訳」	13
【留学報告記】二宮哲「マドリッド留学、10年前と今」	14
【国際研究学会報告】	
野村竜仁「日本と西班牙黄金世紀 ～その交流と影響の諸相～」	15
【書評】	
1. 寺崎英樹『スペイン語史』、大学書林、2011年(菊田和佳子)	16
2. Timothy L. Face, <i>Perception of Castilian Spanish Intonation. Implications for Intonational Phonology</i> , LINCOM GmbH, München, 2011. (木村琢也)	18
3. アメリコ・カストロ『スペイン人とは誰か その起源と実像』、 本田誠二訳、水声社、2012年(本田誠二)	19
4. José R. Cartagena Calderón, <i>Masculinidades en obras: El drama de la hombría en la España imperial</i> , Newark: Juan de la Cuesta, 2008. (斎藤文子)	20
5. カルロス・バルマセーダ『ブエノスアイレス食堂』、 柳原孝敦訳、白水社、2011年(柳原孝敦)	21
【¡NOTICIA!】	
野谷文昭「大学入試センター試験へのスペイン語の導入について」	22
【新刊案内】(2011.6-2012.5)	22
【編集後記】	24

【巻頭言】

パンドラの箱

日本イスパニヤ学会会長兼代表理事に選ばれたという通知を受け取ったとき、真っ先に思い浮かんだのがボルヘスの詩だった。詩文集『創造者』に収められた「天恵の詩」の冒頭はこう歌っている。

誰も涙や非難に貶めてはならない
素晴らしい皮肉によって
私に書物と闇を同時に給うた
神の巧緻を語るこの詩を



野谷 文昭

これは全盲に近くなったボルヘスが国立図書館長に任命されたことをモチーフとした作品で、正確に言えば、この一節のパロディーが思い浮かんだのである。この六月で六十四歳になった。現在勤めている大学は国立で、定年は六十四歳。間もなく定年を迎えようというときに、名誉ある役職を与えられたのだ。偶然か必然かは分からないが、まさに「素晴らしい皮肉」である。

しばらく前に前会長から予告どおり段ボール箱が四つ届いた。それほど古くはないが、使い回されていることは明らかだ。中身が文書であることは容易に想像がつくものの、すぐ開ける気にはなれなかった。目の前に積んであるのがパンドラの箱のような気がしたのだ。いったい何が出てくるのか。ことによると、ありとあらゆる災厄が飛び出してくるのではないか。だが、実を言うと、いささか楽しみでもあった。そこには秘められた歴史を物語る何かが納められているかもしれないからだ。

そんな両面感情を抱きながらついに開けてみた。箱の三つには主に「イスパニカ」のバックナンバーが詰まっていた。あとは予想に違わず書類である。昔の会報や理事会の記録、新入会員のカード、入金票……。列挙の仕方によってはカルペンティエールのバロック的文章のパロディーになりそうだ。ネルーダ、ガルシア＝マルケス、ボラーニョの作品も思い浮かぶ。そうなると検分に祝祭感覚が加わり、気分も陽気になってくる。コンピューターが使われる前の手書きかワープロで書かれた文章の群れはいかにも時代錯誤的である。筆者がパソコンを使い出したのは一九九九年ごろからで、それまでは笹野頼子の揶揄の対象にされてもおかしくないほどの徹底した手書き派だったことを思い出す。なぜパソコンを使うようになったかと言えば、その年に催したボルヘス生誕百年記念シンポジウムを当時勤めていた大学で開くのに必要な書類をいちいち手書きで書くのにうんざりしたことがきっかけだった。イスパニヤ学会でも長らく手書きの時代が続いていたのである。

はっとしたのはそんなときだった。今は亡き恩師、諸先輩方の名前が眼に入ったのだ。そのとたん、箱が別のものに感じられてきた。これは鬼籍でもあるのだ。中上健次の『千年の愉楽』や『奇蹟』に登場する共同体の産婆で語り部のオリュウノオバにはモデルがいて、読み書きはできなかったが人々の生没年を鮮やかに記憶していたという。個人情報の保護が言われるようになって、その種の情報を共有することが難しくなった今、箱のなかにあった古い会員名簿は文字通り貴重な記録と言えるだろう。これからは基本的に紙媒体の名簿は作ら

ないことになったこともあり、オリュウノオバならぬコンピューターが記憶装置を務めることになるからだ。

一方、故人の名の発見によって、箱はユーゴスラビア出身の作家ダニロ・キシユの短篇『死者の百科事典』を連想させるものともなった。父親を亡くした娘が異国の王立図書館を訪ね、そこで『死者の百科事典』とそこに記載されている父親の過去のすべてに出会うという話にはボルヘスの影が感じられる一方、ボルヘスにはない叙情性も漂っている。故人の遺族が箱の中身を見たらどんな思いがするだろう。やはりただの書類や名簿ではあるまい。

そんなことを考えていたら、パンドラの箱には最後に希望が残っていたことを思い出した。学会という組織を媒介に人が繋がっていくこと。それはひとつの希望ではないだろうか。そう思うと理事や会長という役職にも意義が見出せる。とはいうものの、目の前にある四つの厄介なタイムカプセルを来年はどこに置けばいいのだろうか。今からいささか憂鬱ではある。

(のや・ふみあき 東京大学)

【特別記事】

福島英雄たち

寺崎 英樹

昨年3月11日、東北地方太平洋沿岸を中心に大津波が襲ったあの未曾有の震災からすでに1年が過ぎた。地震は単なる自然災害だけではなく、原発事故という二次災害も引き起こした。地震と津波は防ぎようがないが、福島第1原発の事故はたぶん人災的な面があることは否定できない。予想されていた津波に対する安全対策の問題はもとより事故が起きてからの東電と政府・菅内閣の対応に大きな問題があったことは間違いないからである。しかし、事故が起きてから現場やその周辺で緊急の業務に当たった人々の責任感と献身は称賛に値するものだった。戦争中も同様であるが、後方で現場を無視した指令を出す首脳部の無能・無責任とそれに振り回されながら第一線で黙々と任務を遂行する無名の人々の責任感と勇氣、この対照は際立っている。外国では、災害地の住民が暴徒化することもなく、秩序を保って助け合い、不幸を耐え忍んだことが驚きをもって報じられたが、それとともに原発事故の収束のため生命の危険を冒して働いた人々の活動も大きな感銘を与えたようである。その一つの現れが「福島英雄たち」に対するスペインのアストゥリアス皇太子賞授与であった。

アストゥリアス皇太子賞 (Premio Príncipe de Asturias) はスペインの文化勲章のようなものであるが、文化勲章と違うのは対象分野が広く、外国人や団体・組織にも授与されることであろう。アストゥリアス皇太子財団が主宰し、1981年に第1回の授与が行われている。現在は8部門に分かれ、授賞式は名称どおり皇太子臨席の下、アストゥリアス自治州の首都オビエドで行われる。「福島英雄たち (los “Héroes de Fukushima”）」は、その中の平和部門 (la Concordia) 2011年の受賞者となったものである。「福島英雄たち」とは原発事故に対処するため働いた東電関係の作業員、消防士、警察官および自衛隊員を指している。このニュースを初めて聞いたときは、一体だれが授賞式に出ることになるのか興味を引かれたが、昨年10月21日に行われた授賞式には結局陸上自衛隊から2名、警視庁、福島県警、東京消防庁から各1名、計5名の代表が制服姿で出席し、現場で放水作業を指揮した富岡豊彦消防司令が受賞者を代表してスピーチを行った。このニュースだけなら日本のマスコミでも扱いは小さいながら報じられたので、改めて取り上げるまでもないのであるが、昨年9月にこの件について学会会員に知らせてほしいと駐日スペイン大使 Miguel Ángel Navarro 氏が

ら当時会長であった筆者宛に手紙と資料が寄せられた。会報発行の都合で時期遅れとなってしまったが、大使の御意向を汲んでこのことを報告し、以下にその手紙の全文を紹介したい。なお、これに対する返信は昨年すでにお送りしたことを申し添える。

Querido Presidente:

Como ya conoce por las informaciones publicadas en los medios de comunicación, el miércoles de la semana pasada el Presidente del Jurado de la Fundación Príncipe de Asturias anunció la concesión del Premio Príncipe de Asturias a la Concordia a la candidatura de los “Héroes de Fukushima”, que resultó ganadora entre las 44 candidaturas restantes presentadas.

Tal y como el propio Jurado expresó, este Premio ha valorado “la respuesta serena y abnegada del conjunto de la sociedad japonesa desde los sucesos de marzo de 2011, que tuvo su más alta expresión en los grupos de personas que, llevando esa abnegación a un grado heroico, pusieron en riesgo la propia vida al afrontar en la central siniestrada y su entorno las tareas que evitaron una tragedia humana y ambiental de mayores dimensiones, dando al mundo un ejemplo de coraje ante la adversidad, sentido del deber, defensa del bien común y conciencia cívica”.

Este premio ha supuesto un motivo de satisfacción muy especial para mí, suponiendo a mi parecer un mínimo, aunque también muy importante, gesto de solidaridad y afecto por parte del pueblo español hacia el pueblo japonés. Por todo ello, he querido comunicárselo personalmente, haciéndole llegar a la vez un dossier completo de prensa japonesa relacionado con dicha concesión, con el ánimo de que pueda usted difundirlo entre sus socios y afiliados.

La ceremonia de entrega de los Premios, presidida por S.A.R el Príncipe de Asturias, D. Felipe de Borbón y Grecia, está considerada como uno de los actos culturales anuales más importantes en España y tendrá lugar el próximo día 21 de Octubre en la ciudad de Oviedo. Con ocasión de dicha ceremonia, le enviaré un nuevo dossier de prensa que abarque todas las informaciones publicadas al respecto.

Confío tener pronto la oportunidad de conocerle y entre tanto le ruego reciba mis más cordiales saludos.

Miguel Ángel Navarro Portera
Embajador de España

ちなみに、昨年以前にこの賞を受賞した日本人は3人いる。1999年国際協力部門で向井千秋氏（宇宙飛行士）、2008年学術・技術研究部門で飯島澄男氏（ナノチューブ発見者）と中村修二氏（青色ダイオード発明者）である。そして今年コミュニケーション・ヒューマニズム部門で初めて宮本茂氏（ビデオゲーム開発者）の受賞が決定している。

（てらさき・ひでき 東京外国語大学名誉教授）

【エッセイ1】

スペインの教育改革案を巡る議論

柿原 武史

5月の連休直前に大手格付け会社がスペイン国債の格付けを引き下げたというニュースが

入ってきた。その後も大手銀行の国有化や、金融機関に対する格付けの引き下げなども伝えられ、スペインはギリシアとともに欧州危機の震源地として扱われるようになった。このように、2008年のリーマンショック以降、スペインからは景気の低迷、失業の増加、財政の悪化といった悪いニュースばかりが届くようになり、私がスペイン語教員であることを知っている知人や同僚たちからは「スペインも大変ですね」といって話を切り出されることが多くなった。筆者は2002年から2004年まで、スペインに長期滞在する機会を得たが、その当時を含め、少し前までスペインは非常に景気がよく、物価の上昇や住居費の高騰といった問題が話題の中心を占めていた。日ごとに町や道路がきれいになり、多くの商店が買い物をする人であふれかえていた時期を知っているだけに、隔世の感がある。

昨年11月の総選挙で誕生したラホイ (Mariano Rajoy) 政権は、他の欧州諸国からの財政健全化要請に応えるべく緊縮財政政策を採ってきたが、それにより景気はさらに悪化の一途をたどっている。そして、特に若者の失業率が高くなっているため、その対策として、就業力を高めるための教育改革を重要な柱として打ち出した。25歳未満の失業率が50%近くに達しており、その6割が中等教育中退者であるというデータを持ち出し、ベルト (Jossé Ignacio Wert) 教育相は1月、中等教育の改革を中心とした教育改革案を明らかにした。これによると現行の教育制度で4年ある中等義務教育 (ESO) の最終学年を現行2年の後期中等教育 (Bachillerato) または職業訓練 (FP) に移し、それぞれの期間を3年にするという。これは、義務教育修了後の教育課程での中退者の割合が欧州平均の約2倍の28.4%と高いことや、後期中等教育の期間が短すぎることに対応するための施策だと説明されている。そのため、義務教育年限は現行と同じ16歳までとしており、ESOとそれ以降の教育課程をスムーズに接続することが目的のようである。

この改革案に対し、カタルーニャ自治州のリガウ (Irene Rigau) 教育相は、「利点よりも不都合の方が多い」と批判し、他の自治州や労働組合も、後期中等教育の1年目を義務教育にすることで新たに費用負担が増えるのではないかと批判や懸念を表明している。また、この改革案には教員養成や選考方法の再考や、英語による教育の拡大なども含まれており、今後の審議では論争が巻き起こることが予想される。小さな町の学校で教師をしている私の知人は、この改革が実現すると、ESOの教員の多くが、別の後期中等教育校に転勤を余儀なくされるのではないかと心配な心のうちを話してくれた。

様々な批判を受け、ベルト教育相はESOを3年にするという当初の案を修正し、ESOの4年目を生徒が将来の進路を考えるための橋渡し期間にするという新たな提案を行った。政府はこのような中等教育改革を中心とした新しい教育制度を2013年度にも開始したい意向であるが、財政危機の影響も無視できない。4月には教育分野での30億ユーロの緊急歳出削減法案が閣議決定された。これにより、学級定員の一時的拡大、教員の授業担当時間数の増加、大学予算の見直しなどが目指されることになった。自治州ごとに対応は異なるが、大学授業料の値上げや、教員の削減など教員、学生、保護者ともに直接的な痛みを伴う改革であるため、各方面から批判の声が上がっている。こうした状況下で、先に触れた教育制度改革が予定通り議会で審議入りし、2013年度から実現するかどうかは不透明な部分が多い。しかし、財政健全化と若者の高い失業率を抑えるためには、教育改革は喫緊の課題であり、近い将来、スペインの教育制度が大きく変わることはないだろう。

(かきはら・たけし 南山大学)

【エッセイ 2】

OGIGIA: Revista electrónica de estudios hispánicos

Fernando Blanco Cendón

Las inquietudes de un grupo de profesores dedicados, desde diversos ámbitos, a la enseñanza, el fomento y la difusión del patrimonio cultural español, cristalizaron en el año 2006 en el proyecto de crear una revista electrónica. Así nació *Ogigia* como revista de estudios hispánicos, entendiendo como tales los relativos a España, Hispanoamérica y el mundo hispanohablante.

Se trata de una revista electrónica interdisciplinar dividida en los siguientes bloques temáticos: a) lengua y literatura, b) historia y arte, c) didáctica de E/LE.

La lengua oficial de la revista es el español. La publicación consiste principalmente en artículos de investigación, pero se completa con una serie de reseñas bibliográficas de los diversos temas que la conforman. Se trata de una publicación independiente, no sometida al criterio o voluntad de institución o empresa alguna. Está debidamente registrada con ISSN 1887-3731.

Ogigia es una publicación bianual, que se publica en enero y julio de cada año. El primer número vio la luz en enero de 2007 y al tiempo de leer esta presentación habrá salido ya el número 12.

Como revista electrónica que es, *Ogigia* confía en el cauce de Internet, ámbito propicio a la difusión rápida de los estudios científicos, buscando siempre la calidad en sus publicaciones.

Ogigia se adapta a los criterios de calidad exigidos actualmente en el ámbito de las publicaciones científicas, a fin de mantener la calidad de la revista. Y lo ha venido haciendo con tanto esmero que ha sido incluida en la categoría B de la clasificación integrada de revistas científicas (CIRC). Un Consejo Científico formado por profesores que trabajan en Universidades y otros Centros de varios países de Europa, América y Asia se encarga de velar por la calidad de los contenidos.

Ogigia proporciona acceso libre a todos sus artículos, para propósitos de investigación, formativos y para cualquier uso no comercial, mediante la licencia Creative Commons.

Sus artículos y reseñas se encuentran accesibles a través de diversos repositorios documentales como DIALNET, DICE, DOAJ, INTUTE, ISOC, LATINDEX, MLA, RESH, CIRC.

Para más información se aconseja visitar la siguiente dirección: www.ogigia.es

(関西外国語大学)

【エッセイ 3】

ゼミで「コミュニティ演劇」を考える

吉川 恵美子

2012 年度春学期に私が担当する西・西米演劇ゼミのテーマを「コミュニティ演劇」Teatro comunitario とした。地域住民が主体となって地域社会の物語をつくる演劇を指す。地域で暮らす大人も子供も、古いも若きも、男も女も、誰もがこぞって演者として参加し、歌あり踊りあり、楽器演奏もあれば、涙も笑いもある地域の物語を作っていく。こうした演劇がラテンアメリカではひとつのジャンルを形成しつつある。アルゼンチンには 50 人ー場合によって

は 100 人!—ものメンバーを抱える劇団が 40 以上もあると言うから見過ごせない現象だ。

チケットを買って劇場で観るのが「演劇」であると日本の私たちは考える。しかし、プロでなくても演劇台本は書けるし、演じることもできる。見ず知らずの偉い作家が書いた作品よりも、みんなで話し合いながらつくった台本の方が、もしかすると、ずっと身近で面白い物語に仕上がるかもしれないし、そもそも、人間は人前で演じたり歌ったりすることが大好きな生き物だ。ブラジルの Augusto Boal という演出家は、金を払って観る「演劇」とは無縁だった階層に、自己発見のための演劇、自己と社会との関係性をとらえるための演劇を提示した。観客に見せることを目的とする演劇ではなく、演じること自体が目的であり、演じながら社会や政治や自分について考えていく演劇である。ラテンアメリカのコミュニティ演劇はこの演劇理論の延長線上に位置する。むろん、ラテンアメリカには多種多様な演劇文化がある。大資本の商業演劇もあれば、民衆演劇運動の伝統もある。後者は芸術性に優れたプロの演劇集団をいくつも誕生させた。

ゼミでは、アルゼンチンのコミュニティ演劇について書かれた Marcela Bidegain (チリ在住の研究者) の論文をはじめに輪読した。軍事政権下で人々は隣人に対する信頼を失い、地域社会は崩壊したという。地域再生と人々のアイデンティティ回復のために何ができるか。コミュニティ演劇はこの問いかけから生まれた。こうした基本的な理念が明らかになったところで、5 人のゼミ生には個別の研究テーマを探すように指示した。どこをどう探すのか? WEB である。一昔前までは、演劇事象を研究するなら現地に足を運ばなければリアルタイムの情報は得られなかったが、今は WEB 上でかなりのことが分かる。初期リサーチにはなかなか有効なツールである。そもそもコミュニティ演劇の興隆は WEB なくしてはあり得なかった。HP を通じて彼らは発信し、存在を世にアピールしていったのだ。ゼミ生には、コミュニティ演劇のもっとも大きな拠点であるアルゼンチンの Red Nacional de Teatro Comunitario サイトを入り口として教えた。

学生たちはこんなテーマを探してきた。①現代史をテーマにしたある作品の分析。民衆目線の歴史が見えてくる。②コミュニティ演劇とジェンダー。社会的弱者の問題は多くのコミュニティにとって深刻なテーマである。③コミュニティ演劇と音楽。“murga” という音楽劇の様式がコミュニティ演劇に関わりが深いらしい。④コミュニティ演劇と人形劇。YouTube 動画を参照し、舞台装置に注目した。著名な建築家が劇団に協力していることが分かってきた。⑤Facebook で見るコミュニティ演劇。学生本人も書き込みをしながら、おらが町の演劇を人々はどうかとらえているかを観察する。

学期末には全員のレポートを冊子にまとめる予定である。本邦初の「コミュニティ演劇研究レポート集」になるはずだ。

(よしかわ・えみこ 上智大学)

【エッセイ 4】

大学をとりまく環境の変化と大学教員としてのキャリアパス

塚原 信行

社会環境の変化に伴い、人材育成機関としての大学に期待される役割も変化しつつある。高等教育政策に関するさまざまな動きをみても、それは明らかである。例えば、政府の行政刷新会議により 2011 年 11 月に行われた「提言型政策仕分け」では、大学教育がテーマとしてとりあげられており、各種ランキングを通じて見る日本の大学レベルの低下、少子化傾向

の中での定員増・教職員増の是非、定員割れに伴う学力低下や赤字経営大学の増加、将来を見据えた人材育成ビジョンの有無、社会ニーズへの対応の不十分さ、といった論点が上げられている。2012年3月には、経済同友会教育問題委員会が『私立大学におけるガバナンス改革-高等教育の質の向上を目指して-』と題する提言を公表し、「グローバル化が急速に拡大し、科学技術の一層の発展ならびにイノベーションの強化が求められる中、グローバルに活躍できる人材や高度人材へのニーズは増加している。かかる状況下、教育・研究機関としての大学の重要性は高まっているが、我が国の大学がその役割を十分に果たしているとは言えない」という認識のもと、必要とされる「高等教育の質の保証・向上」のためには、「教授会の影響力が強い現状のガバナンス構造を見直し、理事会の経営・監督機能の強化、ならびに執行部門のトップである学長の執行権限の強化が鍵である」と述べている。4月には、国家戦略会議が『次世代の育成と活躍できる社会の形成に向けて』という提言を示しており、「大学の統廃合等の促進を含む高等教育の抜本改革」として、「86の国立大学法人について、今日的な意義や今後の役割等に照らして必要な見直しを行い、新時代に適応する研究・教育を行う特色ある国立大学法人への運営費交付金の抜本的にメリハリをつけた配分などの見直し等を進める」ことを初めとする高等教育改革パッケージの実現をうたっている。

好むと好まざるとにかかわらず、遅かれ早かれ、こうした動きの影響が日常的な教育現場へも及ぶことは、先例からも疑いえない(1991年2月に大学審議会が『大学教育の改善』という答申を行い、これを受けて同年に大学設置基準が大綱化され、専門教育を中心とする学部教育の再編が実施された。これに対する一種の「揺り戻し」として、1998年に『21世紀の大学像と今後の改革方策について』という答申が行われ、教養教育や、教養教育と専門教育の連携が重要になると展望され、その後の大学認証評価のあり方にも一定の影響を及ぼしている)。

こうした状況にあって、大学教員にも、大学組織人としての行動がより一層要求されるようになっていく。具体的には、研究はいうまでもなく、教育実践や学内行政についても一定の能力を発揮することが期待されているのである。こうした状況は研究のみに没頭することを望む者には煩わしいと感じられるかもしれないが、研究のみで大学が成立しているのではない以上、当然と言える(余談だが、行政職務から逃げ回る大学教員の存在を仄聞する。そのようにして確保した研究時間は、同僚を踏みつけにした結果であるということに無自覚なのであろう)。

また、今後大学教員となろうとする者にとっても、キャリアパスを構想する上で、この点は重要となる。研究能力だけでなく、教育能力や行政能力も研鑽していくことを視野に入れなければならないからである(若くして、誰もが認めるずば抜けた研究業績を持つなら別かもしれないが)。ところが、現在の大学院教育では専ら研究指導が行われており、教育能力や行政能力についての配慮はほとんど存在しない。ゆえに、これらについては自己研鑽を図るほかないのであるが、この点に自覚的な者は果たしてどの程度存在するのだろうか。また、この点を理解した上で指導を行っている教員はどれほどいるのであろうか。

社会が変化していけば、大学の役割も変化し、当然の結果として、大学教員に求められる能力も変化する。こうした変化を見据えたキャリアパス構想が、専任職を希望する者だけでなく、現職者にも必要とされる時代となってきたと言えるのではないだろうか。

(つかはら・のぶゆき 京都大学)

【エッセイ 5】

Paradojas fundamentales de la enseñanza del español

Arturo Escandón

Hay dos paradojas mutuamente contradictorias en la enseñanza del español como lengua extranjera que me parece importante abordar. La primera es que los profesores exigen a sus estudiantes espontaneidad. La segunda, el pedir a los estudiantes que aborden la conversación de manera estudiada, fijándose en los detalles y reflexionando sobre ellos. Estas dos paradojas conforman un sistema interconectado que constituye la base de la práctica pedagógica que realizamos a diario en el aula.

En el primer caso, los profesores intentan que los estudiantes comuniquen algo significativo acerca de sí mismos con el objeto de que aprendan una noción particular del sistema formal o pragmático de la lengua española. En el segundo, los profesores desean que los estudiantes sistematicen la comunicación con el fin de llegar a grados más altos de generalización y dominio.

Según Basil Bernstein, toda pedagogía es el arte de inculcar valores, aspecto que llamó normativa u orden social. Los ejercicios o tareas didácticas son una función de esa normativa. La instrucción, la didáctica solo pueden entenderse al alero del paraguas mayor que es la inculcación de un orden valórico. Por tanto, lo que intenta hacer cualquier docente, cualquier profesor, sea este japonés, español o latinoamericano, es que los estudiantes adquieran un nuevo "juego" de valores, que puede o no coincidir con valores ampliamente difundidos en sus lugares de origen. Después de todo, ¿no es el docente una especie de oveja negra? La fuerza de sus enseñanzas proviene precisamente de la capitalización de aquello que es ajeno a la sociedad, lo insólito, lo que resulta extraño. Porque si lo que enseña no fuera especial, entonces la labor de la universidad sería socialmente redundante y menos necesaria de lo que realmente es en la actualidad.

Las paradojas antedichas revelan la verdadera naturaleza de la empresa educativa, la cual parte del vacío, de un vacío existencial: (a) ¿se puede conversar de manera espontánea si se exige una reflexión sistemática de la conversación y acto seguido se la evalúa por sus aspectos formales, nunca por las emociones transmitidas?; y (b) ¿es la conducta que emana de la solicitud de espontaneidad verdaderamente espontánea?

Hace poco me enteré de que en psicología, algunos expertos que enseñan técnicas terapéuticas pasan por el mismo tipo de problema que los profesores de español: cómo hacer que el estudiante haga algo motu proprio sin que, paradójicamente, tengamos que pedirselo.

En el caso de los psicoterapeutas, los docentes buscan de verdad educar en libertad, puesto que el principio fundamental de la disciplina se basa en ese bien tan esquivo. Es el paciente, en definitiva, el que debe rescatarse a sí mismo. En el caso de los docentes de lenguas extranjeras, no me queda tan claro que busquen liberar a los estudiantes. Y los estudiantes parecen más interesados en ser condenados por cuatro años a jugar e esta especie de juego de salón titulado Graduado. Todo está fríamente calculado para graduarse: el porcentaje exacto de asistencia; la presentación metódica de los deberes clonados; la palabra justa y cuidada a los profesores.

El psicólogo Terrance Olson cree que es mejor asignar una tarea que una técnica. La técnica crea una respuesta no espontánea, mientras que la tarea deja al estudiante en

libertad para que examine la forma de aproximarse al objetivo.

Este es precisamente el tipo de problema que uno encuentra en la versión débil del enfoque comunicativo, el cual se basa en la creencia de que la competencia comunicativa se logra mediante la enseñanza explícita de algunos aspectos del sistema formal de una lengua, especialmente aquellos relacionados con la pragmática; pero sin obviar aspectos gramaticales. En otras palabras, se enseña una técnica. La versión fuerte del enfoque, por el contrario, solo establece un objetivo y son los discentes los llamados a encontrar el procedimiento adecuado, aunque esto suela ser una invitación a que hablen en japonés sobre lo estupenda que estaba la comida en la cafetería. En este caso, es muy difícil que los profesores confíen en los estudiantes, se relajen y les dejen buscar la solución por sí mismos. El docente ha de justificar, en último término, su salario.

De esta manera, hemos resumido las paradojas de la educación en su conjunto: Si pedimos demasiado, apabullaremos al estudiante y limitaremos su potencial creativo. Si lo dejamos completamente libre, puede que tome las de Villadiego. La educación correcta es, en definitiva, un sutil equilibrio entre la solicitud de espontaneidad y la solicitud de sistematicidad hasta que los estudiantes puedan remontar el vuelo por medios propios.

(南山大学)

【エッセイ 6】

創作スペイン語料理

安達 直樹

名は思い出したくないが、先日、京都の街中に群生するスペイン料理屋の一つで昼食をとった。そのメニューの中に、「スペイン風あじの南蛮漬け」というのがあったが、その一品はいかにも南蛮漬けの味がした。別の店では、cocido de jamón というのが黒板に書かれていて、jamón の綴りミスかと思ったら、それはまさかの「鰻」の煮込みであった。さらにその店には、golpe de bonito=カツオの「たたき」までもが存在し、創作スペイン料理というより創作スペイン語のオンパレードだった。

ここに挙げた3品の第1品の名には、「スペイン=南蛮」というトートロジーの問題があり、これは最近やたらと見かける「昼のランチ」が典型例で「炎天下の下で挙式を挙げる若い若人」の系統である。文レベルでも、「スペイン語を選んだのは、簡単そうだから選びました」「興味があるのは、スペインサッカーに関心があります」というのが多い。

ところで最近のスペイン語では、自動詞に auto- という接頭辞をつける言い方が多くみられ（すでに70年代にその報告がある）、autosuicidarse 「(自分で) 自殺する」人さえるそう。一人で死ぬのが寂しくて（何という葛藤）わざわざ集まって自殺（心中）、ということがあるご時勢だから、本来の個人的「自害」を auto と言って区別するのだろうか。話は跳ぶが、あるイタリア料理店で珍しいピザを見つけ、どういうピザなのか尋ねたら、店員が「ええつと…丸くてですね…」と説明し始めたことがあった。これは同義反復というより、もはやただの余剰である。ピザはふつう、丸い。「神奈川の横浜という所から来ました」という自己紹介も、その類。

第2品の「jamón=鰻」は、原語をその音とともに忠実に採り入れた外来語（この場合は外国語に無理やり貸出した「押し売り語」とでもいおうか）の例である。日本に住む日系中南米人が使うという gambatear 「頑張る」はそれなりに市民権を得ていそう。ところで jamón

の強勢の位置が気になるが、aに強勢を置くと関東方言になるだろうから、京都人が後ろに置いたのだろう。アクセントに関しては、最近の日本語には進化(?)した例がある。サンマルクカフェの最後の「エ」がそれで、パソコンでは打てないが、会社のロゴにはこの「エ」にアクセント符号がしっかり付いている。フランス語の café の符号をカナにあてたものだ。文字の移入というレベルを超越したというべきか、このような言語表記上の補助記号を借用する例は、日本語史においては疑問符「？」と感嘆符「！」ぐらいではないか。この強勢符号は、「おしゃれ感」という視覚的効果をねらったものだろうから、絵文字や顔文字の感覚で使用したのだろう。

第3品は和製西語というべきだろうか、ここまでくるとまさに創作である。想像力が豊かなのか乏しいのかよくわからない。

以上のいずれにしても、ある意味、昨今言われる「思考停止」を思わせる。ある大学内で資格専門学校のカラダを脱ぎ脱ぎ若いうアルバイトは、ちらし入りのフォルダを「クリアフォルダで〜す」と言いながら配っていた。同様に「ティッシュです」と言って自動車教習所の広告を配る者にも出くわしたことがある。物を餌に広告をつかますということは暗黙にしておくことであって、羊頭狗肉が羊頭羊肉、もはや宣伝という行為をやっている。

初級語学はどうか。4月の名詞だけの対話文では、Un café con leche, por favor. がお決まりだが、毎年必ず「コーヒーと牛乳をお願いします」と訳す者がいる。2つを一杯ずつ注文して飲むような客がいるだろうか。最低限の想像力で情景を思い描けばよい。そんな調子で文構造にも無頓着だから、コーヒーと牛乳は融合しないのに、文の主部と述部が一体化してしまうことがある。「リーは読書が大好きです」Lee muchos libros. や「浜辺で休暇を過ごすパサモスさん一家」Pasamos las vacaciones en la playa.

さらに、比喩や謙遜、皮肉が通じないのも辛い。言葉を額面通り受け取ってしまうので、こちらが卑下して「私は英語が苦手です」などと言おうものなら、本当に “this is a pen” も分からぬ奴と見下されてしまう…「赤子の手をひねるよう」なんて、“ひどい虐待!?” みたいな顔をされる始末。

まるで表も裏もない、終末のオセロは全部白い。

(あだち・なおき 大阪大学非常勤講師)

【エッセイ7】

La Enseñanza de Lenguas en la Tercera Edad

Danya Ramírez Gómez

La Adquisición de Segundas Lenguas en la Tercera Edad es un campo prácticamente virgen. La nueva tendencia, no obstante, consiste en el replanteamiento del potencial de este tipo de alumnado en la AL2, lo que ha sido impulsado en parte por la realidad social actual. La frecuente analogía entre los procesos de AL1 y AL2 fundamentaría la ausencia de interés en esta área; la Hipótesis del Periodo Crítico (HPC, Penfield & Roberts, 1959; Lenneberg, 1967; ver Singleton & Ryan, 2004) considera imposible la AL1 luego del término del desarrollo cognitivo ‘comienzos de la pubertad’. Asimismo, diversos estudios (Asher & García, 1969; Seliger et al., 1975; Patkowski, 1980; Fledge et al., 1999; ver Singleton & Ryan 2004) sugieren la superioridad de la AL2 en los aprendices más jóvenes y han reforzado la creencia de que el proceso de AL2 que comienza luego de la pubertad no lograría un nivel “nativo”.

En oposición a la HPC, se ha propuesto la existencia de varios periodos críticos, una agenda diferente para la adquisición de los diversos aspectos lingüísticos (Seliger, 1978; ver Singleton & Ryan 2004), y además, la existencia de cambios cualitativos en ciertos puntos maduracionales de la adquisición (Lenneberg 1967; Krashen et al. 1978; Long 1990, entre otros; ver Singleton & Ryan 2004). Esto sugiere que la adquisición se produciría mediante diferentes mecanismos a lo largo del desarrollo cognitivo.

Esta propuesta impulsa la reconsideración de las teorías sobre AL2 erguidas sobre la HPC. Kuusinen & Salin (1971) y Locke (1969) (c.f. Cook 1986a; ver Singleton & Ryan 2004) señalan que los jóvenes serían superiores a los niños en la pronunciación de formas fonológicas nuevas; mientras que Asher & Price (1967) y "Barcelona Age Factor Project" (Muñoz 2003a y 2003b; ver Singleton & Ryan 2004) indican que los aprendices mayores se desempeñarían mejor que los más jóvenes en contextos formales. Por otro lado, varios estudios relacionados con programas de inmersión -Harley (1986), Genesse (1979), Adiv (1980), Ervin-Tripp (1974), Walberg et al. (1978)-, también descartarían la inferioridad de los mayores. Ahora bien, los estudios que evidencian ventajas para los aprendices adultos se enfocarían principalmente en habilidades lectoras, sintácticas y léxicas, mientras que los que señalan la superioridad de los más jóvenes se centrarían primordialmente en aspectos fonológicos, orales y auditivos. Esto sugiere que las investigaciones ya mencionadas son difícilmente comparables y no se excluyen necesariamente. Aun así, los estudios basados en la HPC parecen haber logrado mayor acuerdo entre los investigadores.

Si bien hasta finales de los años 90' los estudios sobre el desarrollo lingüístico de los adultos mayores (AM; 60 años o más) abordaban principalmente la degeneración de la L1, recientemente ha surgido un nuevo enfoque: Juncos Rabadán et al. (1998), por ejemplo, indica que los problemas de acceso al léxico en la L1 (Obler & Albert 1984; Burke, Whorhthley & Martin 1988; ver Juncos Rabadán et al. 1998) no dependerían de la edad, sino de variables como la educación y la lengua materna. Asimismo, otros estudios relacionados con los AM evidenciarían (i) la compensación de problemas de memoria operativa por medio del manejo de la atención y los elementos contextuales; (ii) la alta estabilidad de la inteligencia verbal, (iii) el aumento o mantenimiento del vocabulario pasivo (Fox 1947; Hupet & Nef 1994; Salthouse 1988a; ver Juncos Rabadán et al. 1998); (iv) el aumento del conocimiento conceptual (Bayles & Kaszniak 1987; Kemper 1992; ver Juncos Rabadán et al. 1998); (v) el mantenimiento de las capacidades para efectuar decisiones léxicas (Juncos Rabadán et al. 1998); (vi) la adquisición precoz y rápida de elementos sintácticos complejos y estructuras formales explícitas (Alvarado Cantero, 2008), entre otros.

Esta nueva tendencia abre paso a la creación de metodologías aplicables a los AM: Alvarado Cantero (2008), por ejemplo, en su estudio sobre la enseñanza de ELE a AM, discute los cambios motivacionales, de expectativas y objetivos, señalaría la factibilidad de alcanzar competencia oral práctica en corto tiempo y también la necesidad de los AM de conocer las causas de los fenómenos lingüísticos (c.f. Passel 1973; ver Alvarado Cantero, 2008). Otro pionero en la enseñanza a AM es "Lifelong Learning", un programa de la Comisión Europea que enfatiza en lo crucial de las estrategias de estudio auto-dirigido, del carácter bibliográfico de las actividades, y del mantenimiento de la autoridad del aprendiz durante el proceso.

En suma, creencias generalizadas como la HPC explicarían la escasez de estudios sobre AL2 por parte de AM, y la falta de materiales y técnicas ajustadas a estos aprendices. La rectificación de esta tendencia contribuiría enormemente al campo de la AL2 y al proceso de aprendizaje de un tipo de alumnado cada vez más numeroso.

<Referencias>

- Alvarado Cantero, Lucía. (2008). Enseñanza de Español como Segunda Lengua a Adultos Mayores: Algunas Consideraciones. En Filología y Lingüística XXXIV.
- Juncos Rabadán, Onésimo & Rosa Elosúa de Juan, Arturo Pereiro Roza, María del Carmen Torres Marañón. (1998). Problemas de acceso al léxico en la vejez: bases para la intervención. Anales de Psicología.
- Singleton, David & Lisa Ryan. (2004). Language Acquisition: The Age Factor. Second Language Acquisition 9. Multilingual Matters.

(関西学院大学)

【エッセイ 8】

音の翻訳

田尻 陽一

大学でスペイン語・スペイン文学を教える傍ら、名古屋にある劇団クセック ACT の座付き翻訳家としても働いている。スペイン演劇を主に上演する劇団としてクセック ACT を結成したのは 1986 年であったが、座付き翻訳家になったのは 1996 年からである。そのきっかけになったのは、劇団が岩波文庫の三大悲劇集を使って、1995 年、ガルシア・ロルカの『イエルマ』を上演したときである。第 1 幕第 2 場で、イエルマが老婆に向かって「あたしのような田舎育ちの女には、八方ふさがりなんだわ。誰ひとりはっきり言ってくれず、ただほのめかしたり、そぶりを見せたりするだけ。こういうことは教えてもらうことじゃないっていうわけ。あなたも同じで、やっぱり口をつぐんでしまう。そして博士のように何でも知っているくせに、それを死ぬほど知りがっている女に明かそうともせず、チョウゼンと立ち去ろうとしている。」というせりふを言ったからだ。「おい、待ってくれ、そのチョウゼンというのは何だ。超然と漢字で書いてあっても、チョウゼンと発音したら、観客は何を意味しているのか分からないじゃないか。第一、田舎育ちの女が『超然と立ち去ろうとしている』なんて、言うか!」、こうは言ってみたものの、「なら、田尻さん、訳してよ。」という演出家の言葉で、座付き翻訳家になった次第である。

以来、『ドニャ・ロシータ』『イエルマ』『血の婚礼』『ベルナルダ・アルバの家』『五年経ったら』『ドン・ペルリンプリンの恋』と上演してきた。今年は彼の講演、詩、スケッチ、『ドニャ・ロシータ』『血の婚礼』をコラージュして『ロルカ・・・閉ざされし樂園』を作った。ちなみに、上記の場面の拙訳は「あたしのような田舎育ちの女は、八方塞がり。こういったことは人から教わることじゃないと、みんなことばを濁すばかり。親切な素振りだけ。あんたもそう。あんたも^{だんま}黙りを決め込み、学者さんみたいに何でも知ってるくせに、のどが渇いて死にそうな者に、何も教えないで行ってしまう。」とした。戯曲の翻訳は、目で読む文学作品として訳すなら、漢字熟語は使えても、同音異義の多い漢字熟語は観客を一瞬、戸惑わしてしまう。音で理解してもらわないと脚本にはならないのだ。

『血の婚礼』の次の翻訳を見ていただきたい。「あたしは夢で冷たい象牙の鳩をつくり、その鳩にシモノツバキを墓場まで運ばせるの。いいえ、墓場じゃない。墓場じゃなくて、土の寝床へ運ばせるんだわ。」下線のカタカナの部分は「霜の椿」となっている。詩というものは、コトバとコトバがぶつかり合い、新しい詩的イメージを生み出すことだ。読む場合は「霜の椿」でイメージは湧く。しかし、「シモ」「ノ」「ツバキ」という音からどんなイメージがわいてくるだろうか。皆無だろう。拙訳は「あたしは、夢の中で、象牙の冷たい鳩を作る。そいつあ、墓地に飛んでいき、キラキラ輝く霜で、椿の花を振りかけてくれる。いや、墓場じゃない。墓地なんかじゃ、ない。あそこは土の寝床。」とした。「キラキラと輝く」という補足で「シモ」という音が「霜」という意味概念に結びつくだろう。

この場面を稽古しているとき、役者が言った「あそこは土の寝床」という音がどうも耳障りに聞こえる。日本語のタ行は、タ行音とチャ行音とツァ行音が交叉している。「チ」は「cha」行だ。「ツ」は「tsa」行だ。「ツチ」というのは純粋タ行の音ではない。そこで「土の寝床」の前に「やわらかい」という音を入れてみた。「…墓地なんかじゃ、ない。あそこはやわらかい土の寝床。」みなさんも、大きな声で言うてみてください。ガラッと音色が変わったことに気づかれるだろう。

劇団クセック ACT はガルシア・ロルカの作品ばかり上演してきたのではない。現代劇としてアラバールも上演したが、『人生は夢』『ドン・キホーテ』『ヌマンシア』『ラ・セレスティーナ』『フエンテ・オベフナ』といった古典も上演した。これらはすべてスペインに持っている、日本語で上演したが、音の肉体化という別の問題になるので、別の機会に述べたい。

最後に一言だけ付け加えておきたい。脚本には注はつけられないということだ。かといって説明的にならないよう、短くリズムよく、セリフを作らなければいけない。いずれにしても、音を出す役者の生理的制約と、音を聞いて理解する観客の分節作業との間に、演劇空間が成立するのである。

(たじり・よういち 関西外国語大学)

【留学報告記】

マドリード留学、10 年前と今

二宮 哲

2009 年度の長期在外研究休暇を獨協大学から頂き、2010 年 3 月下旬より 2011 年の同月までスペインのマドリードに滞在した。それまでにも私は 1997 年から 2000 年までマドリード・コンプルテンセ大学のスペイン語学専攻のドクターコースに在籍したことがある。今回の滞在でも、コンプルテンセ大学を中心とするいくつかの授業に聴講生として参加することができた。

スペインの大学では、周知の通り、ボローニャプロセスが本格的に動き出したばかりであり、様々な混乱はあったものの、学部 4 年の後、修士 1 年あるいは 2 年を経て、必須授業単位の無い博士論文を書くだけのドクターコースが 3 年というシステムで動いていた。10 数年前の学生当時は学部 5 年の後、授業単位も必要なドクターコースが 3 年であった。大きく異なるのは、修士コースが新たにできたことと、ボローニャプロセスの博士課程では授業がないということだ。確かに、学習システムとしてはグローバル化(?) したように思えるが、周りの若い友人たちを見ていると、修士で授業を受けた後は、数年間黙々と論文を書くのみで、決して有効ではないように見えた。つまり、大学で授業に出て、周りの友人たちと語り

ながら自分の論を検証していくことが難しくなっているというのだ。まだシステムは完全に定着はしておらず、これから修正の見込みを残してはいるようであった。

ことスペイン語学の教授陣に関しては、マドリード自治大学の売れっ子のメンバーに比べるとマドリード・コンプルテンセ大学の教授陣は舞台袖にいる感がある。一昨年度、Ignacio Bosque Muñoz 教授はレアル・アカデミアの仕事に執心されていたようでコンプルテンセで授業はなかった。それにしても伝統的な視点に基づいた言語学とその関連の授業は、10 数年前と比べ、格段に充実していた。私が今回受けた授業を簡単に紹介しよう。Cristina Sánchez López 教授の授業では基礎的な生成文法の知識に基づいて比較の構文を分析した。10 年前に私の tutora を受けてくれた M^a Jesús Fernández Leborans 教授は統語と語彙の間のインターフェイスの理論について最新の動向を紹介しつつ問題点を洗い出すものであった。Silvia Iglesias Recuero 教授は 10 年前にはなかった社会言語学入門の授業を担当していた。Luis García Fernández 教授は意味論から発する様々な問題を、スペイン語の具体例に置き直して非常に分かりやすい授業を展開した。また Luis Sáez del Álamo 教授の行う言語学の方法の授業は、伝統的な記述文法から、スペインの機能文法、言理学や生成文法の視点までを網羅するものであるが、学生が具体的な例を実際に分析しながら言語学的方法論を体感して行く授業構成で出色であった。これらの授業に加えて、自治大学や CSIC で開かれる講演会などに参加することで最新の理論言語学の動向も探ることができる。

10 年前は学生として授業の内容を学ぶことで精一杯だったのだが、今回の留学で修士課程の授業に参加して、当時感じることのなかった大きな収穫を得た。教授陣の教授法である。理論的な授業であってもスペイン語の具体例を、如何に提示して、どのように学生に理解させるのかというその技術には得るものが多かった。自らの力量不足に苦労しながらではあるが、帰国後、いくつかの授業で試している。

震災後に帰国して、改めて感じたことがある。筆不精な私は渡西の度にできた友人をその後つなぎとめておくことが苦手であった。しかし昨今のソーシャルメディアの隆盛で、この研究休暇でできた友人は帰国後も皆そこでつながっている。手紙のやり取りと、ネット上でのつながりはまるで同じだとは言えないが、連絡を取り続けられているこの状況に、やはり、10 余年という時間の流れを感じざるを得ない。

(にのみや・さとし 獨協大学)

【国際研究学会報告】

日本と西班牙黄金世紀 ～その交流と影響の諸相～

Japón y el Siglo de Oro español: relaciones e influencias

野村 竜仁

2012 年 5 月 3 日から 5 日の 3 日間、マドリード自治大学哲文学部と国際交流基金マドリード日本文化センターにおいて、「日本と西班牙黄金世紀 ～その交流と影響の諸相～」(Japón y el Siglo de Oro español: relaciones e influencias) と題した国際研究学会が開催された。冒頭、企画および運営の中心人物のひとり、マドリード自治大学教授の María Jesús Zamora Calvo 氏が挨拶した。中世から近世にかけて、日本とスペインは国家としての統一、孤立化、独自の文化的発展という軌跡をたどり、その過程で南蛮文化などに象徴される交流の歴史を育んだ。そこから派生したさまざまな事象を「日本における黄金世紀」という枠組みで再考し、学際的な研究成果を目指すという研究学会の趣旨説明が行われた。

会場には、スペイン、イギリス、カナダ、日本から言語学、文学、文化、歴史など様々な分野の研究者が集い、日本からは東谷穎人氏、三好準之助氏、原陽子氏、西田依麻氏が参加され、筆者もその末席に連なった。また日本人研究者として、マドリード自治大学の高木香世子氏の姿もあった。

発表者は 16 名で、その内容は多岐にわたった。図像学的な比較検討（高木香世子氏 “Francisco Javier y Urashima”、María Jesús Zamora Calvo 氏 “El diablo y sus máscaras: semejanzas e influencias entre España y Japón”）、西洋的な視点による最初期の日本語研究の特徴（三好準之助氏 “João Tçuzu Rodrigues y el sistema honorífico de la lengua japonesa”、Santiago Urbano Sánchez Jiménez 氏 “*El arte de la lengua japona* (1738) de Melchor Oyanguren de Santa Inés: gramática y contexto”）、宣教師や商人の記録文書を中心とした調査研究（Elena Barlés Báguena 氏 “El arte japonés desde la mirada de los misioneros cristianos durante el Siglo Ibérico en Japón (1543-1640)”、Carla Tronu Montané 氏 “Mercaderes y frailes castellanos en el Japón del siglo de oro”）、造形芸術としての南蛮文化の検証（原陽子氏 “El Castillo de Azuchi de Oda Nobunaga –Visualización de sus ideales políticos y la consiguiente ‘Pax Nippona’”、David Almazán Tomás 氏 “Relaciones artísticas hispano-japonesas en el Siglo de Oro”）、文学および歴史における日本とスペイン語圏の影響関係（西田依麻氏 “El *Quijote* para jóvenes: una edición de la novela cervantina en la era Taishō”、Emilio Sola 氏 “España y Japón en el siglo de oro, historia de un desencuentro”、Luis Miguel Vicente García 氏 “Variaciones sobre el encuentro de Octavio Paz con Matsuo Basho (1644-1694)”、Javier Rubiera Fernández 氏 “Elementos para un estudio comparativo del teatro clásico español y el teatro clásico japonés”）など、いずれも興味深く拝聴した。

研究発表以外に、日本関連の書籍を数多く出版している Satori Ediciones のプレゼンテーションも行われた。会場には研究者以外に多くの学生の姿もあり、日本語や日本文化について熱心な質問が寄せられるなど、日本研究の学士課程を有するマドリード自治大学における、日本に対する関心の高さをうかがわせた。

滞在時間が限られていたため、残念ながら最後に予定されていた発表（José Pazó Espinosa 氏 “Shusaku Endo y la reconstrucción de un vacío histórico”、東谷穎人氏 “Baltasar Gracián y la formación de su concepto idealizador e imaginativo sobre los ‘japoneses’”）を聞くことはできなかったが、参加者の研究発表の内容は Satori Ediciones によって冊子としてまとめられると聞いており、その刊行を心待ちにしたいと思う。

（のむら・りゅうじん 神戸市外国語大学）

【書評 1】

寺崎英樹『スペイン語史』、大学書林、2011 年（pp. 324）

菊田 和佳子

2011 年 5 月、スペイン語史に関心を持つ読者にとって待望の一冊が出版された。それが寺崎英樹著の「スペイン語史」である。

現在のスペイン語を理解するうえで、その歴史を知ることは大きな助けとなる。しかし、日本語で読めるスペイン語史の文献は数が少なく、全体の流れをしっかりと把握するには大学などで講義を受けるか、あるいはスペイン語や英語などで書かれた専門書を自力で読むし

かなかった。しかし、スペイン語史を開講できる教育機関は限られているし、また基礎的な知識を十分に持っていない者が原語で書かれた本を読み、その内容を正しく理解するのは容易ではない。その結果、スペイン語史研究を志す学生も減り、ますます日本語で読める文献が増えないという悪循環が続いている。

近年になって中岡省治氏の「中世スペイン語入門 (1993)」、山田善郎氏 (監修) の「スペイン語の言語 (1996)」のようなスペイン語史の入門書が何冊か出版され、また山田善郎氏 (監修) の「中級スペイン文法 (1995)」のように、スペイン語史を解説する章を備えている文法書も現れるようになった。この数年でスペイン語史を学ぶための環境は徐々に整ってきてはいるようだ。しかし、その扱う範囲は限定的なものが多く、日本語で読める文献はまだ十分にあるとは言えない。一方、2004年には専門家の間で評価の高い Rafael Lapesa の “Historia de la lengua española (第9版 1981)” の日本語訳「スペイン語の歴史」がついに出版された。これは17章737ページにわたって古代からのスペイン語の歴史を網羅的に扱ったものだが、その内容はやや専門性が高く、基礎的知識のない者が読み通すのは難しいと思われる。本書のように、ラテン語以前から現代までのスペイン語の歴史を通史的に扱っている一般読者向けの文献は貴重であると言えるだろう。

本書ではスペイン語の時代区分を (1) ヒスパニアのラテン語、(2) 初期イベロロマンス語、(3) 中世スペイン語、(4) 黄金世紀スペイン語、(5) 近代スペイン語の5つに分け、それぞれの時代の歴史を社会的、文化的観点から概説したのち、その中で生じた言語変化を音韻、形態、統語、語彙的变化の順に紹介している。言語内の変化だけでなく、変化を誘発することになった言語外の要因もまた重視しているという点では、言語社会史的な性質を持つ前述の Lapesa の著作と近い形式であると言えるだろう。また、他のロマンス諸語の語形などが比較対象として数多く挙げられており、主に西ロマンシア全体の諸言語の発展を踏まえたうえで、カスティーヤ語の特性が理解できるようになっているのも Lapesa の良い点を継承していると言える。さらに、本書には Lapesa より新しい研究の成果も反映されており、その中でも研究者たちの見解が一致していないいくつかの現象については、注などの形でその議論にまで言及している。また、最後にはイベリア半島内外の言語の多様性やその歴史についての概説も行われている。こうした情報のおかげで、本書はスペイン語史・語学をすでに専門とする者にとっても示唆に富む文献となっている。

著者である寺崎氏は、長年東京外国語大学でスペイン語史の講義を担当なさってきた。本書にはそのご経験が様々な形で生かされているように思える。その1つの例が、音声記号を可能な限り IPA の記述方式に統一したうえで、従来の RFE 方式との対応表を付している点だ。現在でもスペイン語の歴史に興味を持ち、卒業研究などで語史をテーマに選ぶ学生はわずかながら確実にいる。そういう学生がまずぶち当たるのが音声記号の複雑さである。もちろん、従来の方式に問題がある訳ではないし、そういう技術的な面は各自の努力で克服すべきものだが、専門家でない者にとっては音声学や言語学についての基本的知識を身に付けるだけでも大変なことである。研究の初期の段階でスペイン語史全体の流れをつかむためには本書のような配慮が必要となるだろう。

本書によって、スペイン語史の基本的な流れを把握し、さらに関心を持った者は Lapesa やその他のより専門性の高い文献にあたることになるだろう。本書は入門書とされる文献とより難易度の高い研究書の間の橋渡しとしての役割を果たすものと言える。

(きくだ・わかこ 神奈川大学)

【書評 2】

Timothy L. Face, *Perception of Castilian Spanish Intonation. Implications for Intonational Phonology*, LINCOM GmbH, München, 2011. (pp. 103)

木村 琢也

本書はその題名が示す通り、カスティーヤ・スペイン語のイントネーション知覚の研究書である。

冒頭、著者 Face の「スペイン語のイントネーションの知覚研究はまだ幼児期にある」という現状認識から始まる。1990 年代以降、他言語と同様にスペイン語でもイントネーション研究が盛んになってきているが、その多くは産出研究、すなわち話者がどのようなイントネーションを産出しているかという研究であって、聴者がイントネーションのどの部分からどのような情報を得ているかという研究はきわめて少数である。Face はイントネーションを理解するためには産出研究だけでは不十分であるとし、知覚実験の重要性を強調する。

第 2 章と第 3 章では、Face が行った 2 つの知覚実験について報告される。そこでは、従来の産出研究の結果から信じられてきた事柄が知覚実験によって覆される様を見ることができ。たとえば第 2 章では平叙文 *El marinero examina la nave.* と全体疑問文 *¿El marinero examina la nave?* の判別実験が取り上げられる。従来は発話末尾の *na* から *ve* にかけて F0（基本周波数）が上昇するか下降するかが平叙文と疑問文を区別する最重要の手がかりと考えられてきた。しかし知覚実験により、聴者は *El marinero* まで聞いた時点で 95% 正しく判別できることがわかった。最初の F0 頂点の高さが高いと疑問文と判定されたのである。

第 3 章では広焦点の発話（例えば *¿Qué hacía Ana aquí cuando llegó?* に対する *Manolo le daba el número de vuelo.* という返答）と狭焦点の発話（例えば *¿Quién le daba el número de vuelo?* に対する同じ返答。Manolo が焦点となっている）との判別実験が扱われる。ここでも従来信じられてきたこと（狭焦点発話のほうが F0 頂点のタイミングが早い）と異なり、Manolo 以降の部分の F0 上昇が縮約または消失することが狭焦点発話知覚の最強のキューであることが示される。ちなみにこの事実は日本語（東京方言など）と類似していて興味深い。

最後の第 4 章は、実験で得られた新知見が現在のイントネーション音韻論の主流理論である AM 理論（Autosegmental Metrical Theory; 自律分節韻律理論）に与える示唆について考察する理論的な部分である。Face は AM 理論の基本的想定 of 妥当性を認めながらも、これまでの同理論には全くなかった音域枠（pitch scaling frame）という新概念を導入して、観察事実と理論との整合性を追求する。

科学実験が備えているべき要件のひとつに「再現可能性」がある。第 2、3 章に見られる Face の実験記述は詳細で、同じ実験をしようと思えば正確に再現できるように書かれている。実験結果の表による示し方も、見やすいように工夫されている。そしてその後に実験結果に基づいた理論的考察へと進む構成は、この種の研究書の手本とすべき模範的な書き方であると言えよう。

本書の最後で Face は「本書が、本書で扱われたトピックやそれに関連するトピックについての更なる研究を促すことを期待している」と述べる。そして「従来 2 つの音韻的に異なる上昇ピッチ・アクセント（ L^*+H と $L+H^*$ ）とされてきたものが実際には単一の音韻的上昇ピッチ・アクセント（ $L+H^*$ ）の 2 種類の音声的実現であるという証拠が得られたが、このアクセントの音声的アライメント（調音と F0 変動との時間的対応関係）を決めている要因は何か？」に始まる 7 つの疑問を投げかけて本書は終わっている。スペイン語のイントネーシ

ョンに興味を持つ者にとって、研究意欲をかき立てられる「元気になる」一冊である。

(きむら・たくや 清泉女子大学)

【書評3】

アメリコ・カストロ『スペイン人とは誰か その起源と実像』、本田誠二訳、水声社、2012年 (pp. 541)

本田 誠二

本書は現代スペインの碩学アメリコ・カストロ(1885～1972)の晩年の書『スペイン人はいかにスペイン人となったか』(Américo Castro, *Los españoles: cómo llegaron a serlo*, 1965)および『外来語としての〈エスパニョール〉』(*Español, palabra extranjera*, 1970)を合本にして改題し、翻訳出版したものである。

『スペイン人はいかにスペイン人となったか』は、以前『スペイン人一起源、存在、実体』(1959)という名称で出版された著書を大幅に改定・改題したもので、その題名のごとく、スペイン人のアイデンティティを根本的に問い直すという目的をもっている。著者はスペイン人とはいったい誰なのか、というきわめて根本的な問題を提起し、公式の歴史学が前提としているような、太古の昔から原スペイン人(homo hispanus)なるものが今日まで存続しているという見方を神話として否定する。何となればスペイン人という独特の人間集団は、レコンキスタの過程の中で形成されたもので、レコンキスタ以前のスペインには存在していなかったからである。というのもレコンキスタで異教徒たるイスラム教徒に対して立ち上がったキリスト教徒たちは、自分たちを《キリスト教徒》と称するか、さもなくば各王国名と結びついた名称(レオン人、カスティーリャ人、ナバーラ人、アラゴン人、ガリシア人等)でもって自らを呼ぶことはしても、〈われわれ〉意識をもつ《スペイン人》とよぶことはなかったからである。ところがレコンキスタの趨勢が決する13世紀前半に、サンティアゴ巡礼でスペインにやってきた外国人(プロヴァンス人)が、イベリア半島北部のキリスト教徒たちを〈エスパニョール〉と呼んだことから、自らもそのように称するようになったというのが真相である。そのことをカストロはスイス人ロマンス語学者ポール・エビシェールの著書によって言語学的に裏付けている(R・ラペサもその論点を支持)。

こうした事実にもかかわらず、スペイン人は異教徒との長年の葛藤・対立のなかで自らが生成されてきたとも思わず、イベリア半島には太古の昔からスペイン人が存在していたかのように思い込んできた。そうした神話はキリスト教徒によるユダヤ人やイスラム教徒の追放を通じ、純粋なカトリック的イデオロギー(血の純潔)が支配するようになるとますます増幅していった。こうした盲目的な信仰に裏付けられた愛国心が、内戦のような兄弟殺しのスペイン的悲劇を生む原因であるというのが、カストロの見方である。カストロの主著『スペインの歴史的現実』(1954、1962)が、やや専門性が高く、独自の理論的枠組みを緻密な歴史学的方法で提示していて、いささか一般の読者にとって読みづらいが、今回の作品は読み物としても刺激的で、カストロの思想を知るうえで大いに役立つものとなるはずである。

(ほんだ・せいじ 神田外語大学)

【書評 4】

José R. Cartagena Calderón, *Masculinidades en obras: El drama de la hombría en la España imperial*, Newark: Juan de la Cuesta, 2008. (pp. 382)

斎藤 文子

スペイン黄金世紀の演劇をジェンダー・スタディーズの観点から分析する研究は1980年代に始まったが、とくに名誉をテーマにしたコメディには、新たな読みの光が当てられることとなった。本書は、ジェンダー・スタディーズのなかでも最近注目が集まっている *masculinidad* (日本語に訳しづらいので本稿では原語のまま使う。男性性、男らしさというような意味) を切り口にして黄金世紀の文学を読み解く研究書である。最新の研究動向を踏まえて書かれたこの本は、黄金世紀演劇研究者のみならず、他の文学ジャンルを専門とする者にも大きな刺激を与えてくれるだろう。2008年刊行なので新刊書書評の趣旨から多少外れるが、取り上げて紹介したいと思う。

著者は、スペイン没落の原因は *masculinidad* が失われたことにあるという言説が当時広く流布していたことに注目し、近世スペイン文学において *masculinidad* の構築が中心課題の一つだったと考える。この時代のスペインで複数の *masculinidades* がまさに構築中(en obras)であったというのが、本書のタイトルの意味するところである。全体が四章から構成され、著者の主張する形成途中の *masculinidades* を文学作品、とくにイデオロギー教育の手段の一つであったとされる演劇作品のなかで検証していく。

最初の二章はロペ・デ・ベガの作品を取り上げ、正統的な *masculinidad* がどのように構築されているかを見る。近年の研究では、ロペの演劇は体制順応的だとする評価が見直され、むしろその多義性が指摘されているが、著者はこの研究成果を認めつつ、それでも彼の作品の多くは、キリスト教スペイン帝国のアイデンティティ、および帝国の栄光を導いた *masculinidad* という言説の構築、維持、賞揚に加担している、と分析する。第1章は、レコンキスタに題材をとった *Los hechos de Garcilaso y moro Tarfe* (1579-83) と *La envidia de la nobleza* (1613-18) を、第2章では、新大陸征服戦争を扱った *El Nuevo Mundo descubierto por Cristóbal Colón* (1598-1603) と *Arauco domado* (1598-1603) を検討する。これらの作品では、スペイン人に征服された非キリスト教徒(イスラーム教徒とインディオ)が、男らしさを欠いた女々しい者として描かれていることを示し、他者を女性化して対置することで、強いスペイン帝国を表象する *masculinidad* が強調されていることを明らかにする。

残りの二章では、演劇以外の作品も取り上げながら正統的 *masculinidad* に対する非正統的な *masculinidad* の存在に目を向ける。第3章は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』と幕間劇 *El retablo de las maravillas* をおもに扱う。スペイン帝国の政治・経済的権力が都市に集中するようになると、貴族社会における理想の男性像は、地方暮らしをしながら君主のために戦う騎士の *masculinidad* から、都市に住み国政に携わる宮廷人の *masculinidad* へと変貌していった。武の道を選ぶべきか文の道を選ぶべきかという当時の論争は、この変化を背景にしている。もはや時代遅れの戦う騎士を演じ切ることができなかったドン・キホーテは、ロペが戯曲のなかで登場させる模範的な男らしさへのパロディでもある。一方幕間劇の方は、男性登場人物の名前が男性性欠如を表していることに注目し(Castrado, Capacho など)、さかさまの世界が出現していることを指摘しつつ、同じくロペの模範的な男らしさへのこだわりに対するパロディであると読み解く。最終章の第4章は、ティルソ・デ・モリーナの *El vergonzoso en palacio* (1611)、アグスティン・モレートの *El lindo don Diego* (1662)、

セルバンテスの *El amante liberal* (1613) を扱い、宮廷人の *masculinidad* が *lindo* という女性的な人物に戯画化されて表象されていることを分析する。この章では、カルデロン他、多くの作品に Juan Rana の役名で登場し、幕間劇最高の喜劇役者とうたわれた Cosme Pérez に触れ、同性愛者を表す *masculinidad nefanda* についても論じている。

以上が本書の概要である。名誉の問題、文武の対立、都会か田舎かの論争、女性化される他者等、扱うトピックスの多くはお馴染みのものだが、ジェンダー研究の最新の成果を取り入れると、こんな新たな発見があるということを見せてくれる好著である。

(さいとう・あやこ 東京大学)

【書評 5】

カルロス・バルマセーダ著『ブエノスアイレス食堂』、柳原孝敦訳、白水社、2011 年、(pp. 227)

柳原 孝敦

カルロス・バルマセーダ『ブエノスアイレス食堂』の翻訳は、いろいろな紆余曲折を経て私の手に委ねられた。その結果、少なくとも一年、出版が遅れてしまった。先に『野生の探偵たち』を進めろと言われたからだ。『ブエノスアイレス食堂』には登場人物のひとりが書いた『南海の料理指南書』という、人間の運命に翻弄されて多くの者の手から手へと受け継がれる奇書が出てくるのだが、まるでそれみたいだ。

そういえばこの小説は、原題を『食人者の指南書』*Manual del caníbal* と言うのだった。ここで言う「食人者」が最後のカタストロフの場面で握りしめているのがこの『指南書』。つまりこれはタイトルになった本なのだ。その当の『指南書』みたいだというのは、すてきなことだ。

『ブエノスアイレス食堂』は同名のビストロが主人公の小説と言っていい。それが『指南書』同様、多くの人の手から手へと渡る。レストランを建てたのはイタリア移民ルチアーノとルドビーコのカリオストロ兄弟だ。この双子の兄弟はしかし、開業直後に悲劇に見舞われ、建物はおじのアレッサンドロ・シアンカーニの手になり、厨房は兄弟の師マッシモ・ロンブローゾが仕切ることになる。アレッサンドロは祖国でのファシストの台頭を機に行方不明になった親戚を追って帰国、店はマッシモとその息子レンツォ、それに彼と結婚したアレッサンドロの娘マリアが継ぐことになった。しかしロンブローゾ親子は、アルゼンチンの軍事政権の弾圧を受けて非業の死を遂げ、未亡人のマリアがレンツォの一粒種フェデリコを助けてやっとレストランを再開したときには、Uボートの料理人ユルゲン・ベッカーをシェフに迎えることになる……こうして時代に振り回されて入れ替わり立ち替わりする経営者の人生が、美味しそうな料理の数々の微細を穿った描写と対照をなしながら、淡々と綴られる。常に変わることなくそこにあり続けているのは、ただビストロの建物だけなのだ。

思いがけずいただいた仕事だし、何しろ前評判も充分な大作『野生の探偵たち』の後に取らなかった原書にして二百ページたらずの作品だしで、私自身がこの小説を過少評価していたのかもしれない。期待した以上に評判が良く、いろいろな反応をいただいた。パトリック・ジュースキント『香水』との近親性を指摘する声には、教えられもした。

が、管見の限り、まだどなたも触れていない要素が少なくともひとつある。この小説が最後のカタストロフで終わったわけではない、ということだ。レストランはその後にも存続しているのだ。一九一一年に竣工したブエノスアイレス食堂は「七十年の長きにわたり」あらゆる階層の客を魅了し、八十五年目の一九九六年、二代目シェフの末裔セサル・ロンブローゾ

の悲劇によって幕を閉じるかに見える。しかし、最初に建てられたことを報告するシーンで、既に予告されているのだ。「食堂はもう建って九十年になるが、古めかしくも上品なフォルムをいまだに保持している」と。そして今では内装はすっかり様変わりしてしまったことも事細かに描写されている。つまり、少なくともカタストロフの四年後までには、新たな経営者がまったく新しい店舗として再開しているということだ。ビストロを巡る物語には続きがあるに違いないのだ。

ブエノスアイレス食堂は、アルゼンチンはマル・デル・プラタ市、イポリト・イリゴーエン通りとリバダビア通りの南東の角に、今も存続している。

(やなぎはら・たかあつ 東京外国語大学)

【¡NOTICIA!】

大学入試センター試験へのスペイン語の導入について

平成24年 7 月20日

日本イスパニヤ学会

(会長・代表理事 野谷文昭)

去る 7 月12日、在京のスペイン語圏19ヵ国の大使が平野博文文部科学大臣に対し、大学入試センター試験の「外国語」における選択言語のひとつにスペイン語を導入することを望む書面を提出しました。本学会はこの要請を支持いたします。

スペイン語話者数の多さ、スペイン語を用いる国・地域の広さ、および現代世界におけるコミュニケーション言語としてのスペイン語の重要性については上記要請書の指摘する通りであり、日本でも現在以上に多くの高校生、大学生がスペイン語を学ぶ必要があること、したがって教育機関、行政が彼らにスペイン語学習の十分な機会を提供しなければならないことは論を俟ちません。

加えて、十分とは言えないまでもかなりの数の高校生が現在すでにスペイン語を学んでいるという事実にも目を向ける必要があります。高等学校で開設されている英語以外の外国語科目は、学校数の順に 1 位が中国語、2 位が朝鮮・韓国語、3 位がフランス語、4 位がドイツ語、5 位がスペイン語であり、大学入試センター試験においては 4 位以上の外国語はすべて選択科目として用意されています。ところが、スペイン語を開設している高等学校数はドイツ語のそれに迫るものである（2007年度においてドイツ語157校、スペイン語135校）にもかかわらず、センター試験においてスペイン語を選択することはできないのが現状です。これが高校生のスペイン語学習意欲を阻む原因となっている可能性は否定できません。

以上の理由から、本学会はこの度の要請に賛同し、大学入試センター試験へのスペイン語導入について積極的に検討していただけるよう、文部科学省をはじめとする関係各機関に強く要望する次第です。

(のや・ふみあき)

【新刊案内】

【2011 年 6 月～2012 年 5 月】

○二村久則編『コロンビアを知るための 50 章』、明石書店、2011 年 6 月。

○ラモン・ビラロ『侍とキリスト ザビエル日本航海記』、宇野和美訳、平凡社、2011 年 6 月。

- 国本伊代編『現代メキシコを知るための60章』、明石書店、2011年7月。
- 『不思議の国のガウディ』、エクスナレッジ、2011年7月。
- 苦米地英人・フィデル・カストロ・ディアスバラールト『もう一歩先の世界へ：脱資本主義の革命が始まった』、徳間書店、2011年7月。
- レヒナルド ウスタリス アルセ『チェ・ゲバラ：最後の真実』、服部綾乃、石川隆介訳、武田ランダムハウスジャパン、2011年7月。
- 野谷文昭編『日本の作家が語るボルヘスとわたし』、岩波書店、2011年9月。
- ホルヘ・マンリーケ『父の死に寄せる詩』（『死の舞踏』収録）、佐竹謙一訳、岩波文庫、2011年9月。
- 楠貞義『現代スペインの経済社会』、勁草書房、2011年10月。
- カルロス・バルマセーダ『ブエノスアイレス食堂』、柳原孝敦訳、白水社、2011年10月。
- バルタサル・グラシアン『処世の知恵』、東谷頼人訳、白水社、2011年10月。
- 大高保二郎、松原典子『もっと知りたいゴヤ 生涯と作品』、東京美術、2011年10月。
- 安藤哲行『現代ラテンアメリカ文学併走』、松籟社、2011年10月。
- マリオ・バルガス・リョサ『密林の語り部』、西村英一郎訳、岩波文庫、2011年10月。
- ロサリア・デ・カストロ『ガリシアの歌（下）』、桑原真夫訳、行路社、2011年11月。
- 外尾悦郎『サグラダ・ファミリア：ガウディとの対話』、宮崎真紀訳、原書房、2011年11月。
- マリオ・バルガス・リョサ『悪い娘の悪戯』、八重樫克彦、八重樫由貴子訳、作品社、2011年12月。
- サンティアゴ・パハーレス『キャンパス』、木村榮一訳、ヴィレッジブックス、2011年12月。
- フェルナンド・バリェホ『崖っぷち』、久野量一訳、松籟社、2011年12月。
- アメリコ・カストロ『スペイン人とは誰か その起源と実像』、水声社、2012年1月。
- エベリオ・ロセーロ『無慈悲な昼食』、八重樫由紀子、八重樫克彦訳、作品社、2012年2月。
- ファン・マルセー『ロリータ・クラブでラブソング』、稲本健二訳、現代企画室、2012年2月。
- 平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅：十六・十七世紀のマニラ』、法政大学出版局、2012年2月。
- フロレンティーノ・ロダオ『フランコと大日本帝国』、深澤安博、八嶋由香利、深澤晴奈訳、晶文社、2012年2月。
- 加藤薫『骸骨の聖母サンタ・ムエルテ：現代メキシコのスピリチュアル・アート』、新評論、2012年3月。
- ファーナ・カストロ、マリーア＝アントニエタ・コリンズ『カストロ家の真実：CIAに協力した妹が語るフィデルとラウル』、伊高浩昭訳、中央公論新社、2012年3月。
- カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』、寺尾隆吉訳、現代企画室、2012年3月。
- 中島晶子『南欧福祉国家スペインの形成と変容：家族主義という福祉レジーム』、ミネルヴァ書房、2012年3月。
- 田中裕也『実測図で読むガウディの建築』、彰国社、2012年3月。
- 島田泉・篠田謙一『インカ帝国：研究のフロンティア』、東海大学出版会、2012年3月。
- 『じゃがいも事典』、いも類振興会、2012年3月。

- マリア・カステジャノス、佐野直子、敦賀公子『たちあがる言語・ナワト語』、新泉社、2012年3月。
- 高垣敏博『これなら覚えられる!スペイン語単語帳 (CDブック)』、NHK出版、2012年4月。
- アラン・セール『ゲルニカーピカソ、故国への愛』、松島京子訳、富山房インターナショナル、2012年4月。
- マリャヨランダ・フェルナンデス、上田隆『スペイン語文法ワークブック：中級へのステップアップ (CD付)』、三修社、2012年4月。
- 下田幸男『わたしのスペイン語：32のフレーズでこんなに伝わる (CD付)』、白水社、2012年4月。
- 長谷川信弥『スペイン語 (世界の言語シリーズ7) (CD付)』、大阪大学出版会、2012年4月。
- 『スペイン 2012/13年版—経済・貿易・産業報告書』、ARC 国別情勢研究会、2012年4月。
- J・イグナチオ・ドメネク・アロンソ『TeVe oスペイン語中級：楽しく覚えるスペイン語』、ディーティーピー出版、2012年4月。
- 青山和夫『マヤ文明：密林に栄えた石器文化』、岩波新書、2012年4月。
- オラシオ・キローガ『野性の蜜：キローガ短編集』、壺由己夫訳、国書刊行会、2012年5月。
- 萩尾生、吉田浩美『現代バスクを知るための50章』、明石書店、2012年5月。
- 星野真澄『外尾悦郎、ガウディに挑む：解き明かされる「生誕の門」の謎』、NHK出版、2012年5月。
- アナ・マリア・マトゥテ『北西の祭典』、大西亮訳、現代企画室、2012年5月。
- 中谷光月子『増補改訂版 サンティアゴ巡礼へ行こう！ 歩いて楽しむスペイン』、法政大学出版局、2012年5月。

【編集後記】

昨年度に続き今年度もようやく「会報」19号の完成まで漕ぎ着けました。寄稿して下さった皆様には、紙面をお借りして感謝申し上げます。

今回の内容としては、昨年度掲載した「国際学会案内」をとりやめ、その代わり一人でも多くの皆様にスペイン語およびスペイン・ラテンアメリカにまつわる記事を書いていただき、新しい情報を共有したいと考え、エッセイの数を昨年度の倍以上に増やしました。お役に立てば幸いです。

なお、次回の「会報」に向けて、ご意見・アイデア等があればお聞かせください。

(広報委員会・委員長：佐竹謙一)